

## 会議録（要旨）

件名	平成30年度 第1回亀岡市総合教育会議		
日時	平成30年6月26日（火）		
	午後1時00分～3時25分	場所	市役所1階 市民ホール
出席委員	7人 桂川市長／石野副市長／田中教育長／関教育長職務代理者／吉岡教育委員／ 江口教育委員／北村教育委員		
欠席委員	なし		
事務局出席者	12名 内田企画管理部長／田中企画調整課長／佐藤企画経営係長／ 笠井主任／山本教育部長／和田教育部次長兼総括指導主事／ 片山教育総務課長／土岐学校教育課長／大西社会教育課長／ 亀井社会教育課人権教育担当課長／海老原教育研究所所長／ 加藤教育総務課総務係長		
傍聴者数	1名		

### 1 開会

### 2 市長あいさつ

教育委員の皆さまには、日頃から本市の教育行政の推進に、格別の御理解と御協力を賜り厚くお礼申し上げます。

6月18日の大阪北部地震では、高槻市の小学校でブロック塀の倒壊により1人が亡くなられた。大変残念なことである。亀岡市教育委員会でも学校施設の状況確認及び通学路を含めて調査を行っているところである。今週中には調査結果と併せて対策を講じていくので御協力をお願いする。

本日は、本市の教育施策の重点事項について意見交換をさせていただく。

4月に行われた学習調査の結果を見ると、亀岡市は京都府の平均を下回っている。スポーツで頑張ってくださいことも大事だし、学力だけでは測りきれない部分もあるが、学力向上、子どもたちの学習環境の向上をしっかりと考えていかないといけない。トイレや空調等の学校施設整備についても引き続き取り組んでいく。

この総合教育会議を通じて、これまで以上に連携を深め、亀岡市の教育の更なる充実に向けともに一層努力をしまいたいと考えているので、皆様の忌憚のない御意見を願います。

### 3 協議事項「教育施策の重点項目」について

#### 教育長が教育施策の重点項目について説明した後、出席委員が意見交換

##### (1) 学校規模適正化について

###### 教育長（説明要旨）

平成 26・27 年度の 2 年に渡り議論し、アンケートやパブコメを踏まえて基本方針をまとめ、これに基づき取組を進めてきた。別院中学校ブロックでは、東・西別院小学校は、特認校として存続を図っていくこととしている。別院中学校は南桑中学校と統合を含め検討したが、地元には地域に中学校を残して欲しいとの要望がある。今後のあり方について、地域の中でも議論いただく方向で進めている。東輝・詳徳中学校ブロックにおいては、安詳小学校の過密状態を緩和することと、安詳小学校とつつじヶ丘小学校からはそれぞれ 2 つの中学校に別れて進学することを解消することによって、小中連携を充実させるとした当初の案から、いろいろな意見・要望、指導をいただいていたところである。平成 29 年度末まで繰り返し地元の説明を行ってきたところであり、この 5 月にブロック協議会を開催し、一定の賛同が得られたことから 6 月 1 日に保護者や該当地域に周知を行った。まだ反対意見もあるが、何とか御理解を得られるよう丁寧に進めていきたい。ただ、つつじヶ丘小学校から亀岡中学校に進学している地域については、東輝中学校へ進学するという案を示したが、現状維持でとの声が多く調整中としており結論に達していない。7 月中には亀岡中学校ブロックの協議会を立ち上げ、調整中としている地域の対応、亀岡駅北開発に伴う校区設定、保津小学校の特認校化等について議論いただきながら進めることとしている。中期的なこととしては、育親中学校ブロックについても議論が必要と考えている。まず地元で意見をまとめていただく中で、教育委員会としても支援しながら進めていきたい。

##### (2) 小中一貫教育について

###### 教育長（説明要旨）

亀岡市の学力状況は大変厳しい。いろいろ努力いただいているが、小中連携した取組を充実させることがキーとなると思っている。亀岡川東学園では、小中 9 年間のカリキュラムを見直し、教科担任制や小 1 からの英語教育等の特色ある教育を行っており学力も上がってきている。育親中学校ブロックについても同様である。他の地域についても、小中連携を推進することが学力向上につながると考えている。平成 28 年度から小中一貫教育校等の設立が可能となった。小中一貫校は、独立した各学校が連携して教育を進めるもので、これを一步進めたものが義務教育学校である。施設分離型の義務教育学校も可能で、中学校に校長、各小学校に副校長を配置

する形で進めている例もある。小中一貫教育校や義務教育学校では、どんな特色を持たせるかが重要となる。資料の9頁に記載されているように、学年区分の変更や学習指導要領の先駆的な実践研究、特別な教科設定等の特色を持たせていく。学校ごとにどういった取組がマッチするのか、議論や研究をいただきながら、カリキュラム編成や地域との連携を図り、平成34年度を目途に取組を進めていきたい。作ることが目的ではなく、学校の組織力を高め学力を向上させることを目的とする。

## 市長

適正化は数合わせであってはならない。学力向上やいろいろな意味での「壁」を減らしていけるものにしなければならない。適正化と併せて、小中一貫教育等特色ある取組を進めていきたいと考えている。また、東輝・詳徳中学校ブロックのことで先日要望をいただいている。教育委員会に丁寧に調整をいただいているが、100%理解を得られているわけではないと感じている。

## 委員

児童・生徒ファーストで考えたい。地域から学校が無くなることに抵抗はあると思うが、最後は子どもたちを「どう育てるか」で判断してほしいと思う。同時に小中一貫教育を進めていきたい。小規模校の場合配置できる教職員数が限られるため、中学校では専門の教員が揃わないことも考えられる。これは子どもにとって幸せなことだろうか。また子どもは多人数の中で、切磋琢磨する環境の中で育つことが大切である。この時期にしかできない大事なことを、何とかして整えていかなければならない。

## 委員

複式学級の解消は必須である。本市においては、小中一貫教育を全ての学校でなされるべきと考える。「学力向上」「生徒指導」「特別支援教育」を3つの柱にして推進していくとよいと考える。もし、自分が校区変更の対象となれば混乱するし、期間も必要だし丁寧な説明も求める。納得されない方もおられるかもしれないが、手厚い説明を継続していただきたい。

## 市長

全学校の小中一貫教育という御意見に賛同する。そのためにも適正化を推進する。特別なカリキュラムが組めることも大事である。

## 委員

大筋では同意する。規模適正化は新しい教育の形の生成につながる。ただ地域の反対意見については、学校は教育サービスの提供だけでなく、地域の文化の拠り所であると感じている。校区が設定されてから年数が経過し、人口分布も変化していく中で見直しは避けられないが、不安に思われる気持ちを解消するには「よりよい教育の実現」で返していくのが良いと考える。小中一貫教育の実現は、簡単ではない。現場の先生方だけでなく、環境・施設面を含めて行政も覚悟を決めてとりかからなければよい効果は見込めない。

## 市長

小学校の統廃合を前提とした適正化は、できれば避けたいと考えている。小中一貫校は制度としては可能であるが、施設分離型の場合はどうなるかなどの検討は必要で、デメリットもあると考えている。「子育て・教育であこがれのまち」に取り組んでおり、これまでもトイレや空調など学校施設の整備を積極的に進めている。今後は、学習環境（ICT化も含む）整備についても、各学校の特色に合わせて進めなければならない。校区が変わるとなれば新しい通学路になる。その場合の安全・安心の施設整備は必要で、安全対策に万全を期して心して取り組まなければならない。

## 委員

東輝・詳徳中学校ブロックで方向が出せたことは前進である。丁寧に地域に入って説明を行い、地域からも提案が出された中で方向性が決まったことはとても良い成果と考える。別院中学校ブロックでは、特認校を実施したが児童数はあまり増えそうにない。地域から、中山間地域の義務教育学校という提案が出たことは素晴らしいと思っている。育親中学校ブロックは、もともと小中の連携がうまくいっている。これを活かして一体化していただければと考える。宮前町では、移住特区申請で教育を地域の特色とするという声もあるが、適正化に対して学校が無くなるというイメージを持たれている方がまだおられるのも事実。一体化しても人数は変わらないが、小規模の良さを活かした小中一体化ができれば良い。

## 市長

別院地域からの提案はこれからの課題である。西別院町は移住特区にもなり、少し人口も増加している。

## 教育長

統廃合を考える時、子どものことを考えるのは当然であるが、廃校となった学校を交流の場として活用し、地域活性化につなげるというやり方もある。両面を同時に考えていかなければいけない。西部地域は交通アクセスがよくなる。仮に統廃合をすればしたら、同時に施設の利活用事業を検討することが、地元の不安を解消する一助となるのではと考える。教育委員会では対応できない部分もあるので、市長や関係部局にお手伝いいただきながら検討していきたい。

## 市長

昨日の本梅町の地域こん談会でも話が出た。市が「どう考えるか」もあるが、できればまず地域で「どう子どもを育てていくか」について意見交換をしていただきたい。市としてはまず短期の部分（東輝・詳徳中学校ブロック、別院中学校ブロック）の方向性を出していければと考える。今すぐ西部地域に入っていく状況ではない。地元の意見を聞きながら今後進めていきたい。

## 委員

学校に空き教室があれば社会教育で利用してもらおう。地域に学校の状況を見てもらう場を作れば、現状を認識していただくきっかけとなるのではないかと。地域の方に学校へ来てもらう仕組み（例えば老人会の集りの場所提供）を作ると学校へ来やす

くなる。

#### **委員**

小中一貫教育については、具体的な提案ができるといい。例えば中学1年生で履修する数学を、小学5年生の算数のこの部分に関連があるので5年生で教える。基礎基本をしっかりと身に付けるため、小学校で漢字1,000文字をしっかりと覚える。といった魅力あるカリキュラムができるという具体例があれば伝わりやすい。

#### **市長**

子どもたちだけではなく、地域との交流も必要である。現状を知っていただく中で議論すべきという御意見はもっともである。自然に学校に来ていただける仕組みを、教育委員会にも考えてもらいたい。

#### **教育長**

今年から、別院中学校ブロックでは3校合同運動会を開催し、地域の人にも来てもらおうという企画をしている。西部地域でも学習発表会的なことは検討しておられる。できることを検討し、地域の方にも入ってもらえるようお願いしていきたい。

#### **市長**

相互理解が深まればよい方向に進むと考える。

### **(3) キャリア教育について**

#### **教育長（説明要旨）**

人生100年時代。一方で今の子どもが大人になる時には、今ある仕事の半分がなくなっていると言われていて。将来を見据えてどんな仕事につくのか、どんな能力が必要になるのか、どう生きていくのかを子どもたちに考えさせることが必要である。その指導のためにキャリア教育をお願いしている。小学校では、それぞれの目標を設定して身近な職場を見学したりすることで、勤労観や将来の目標を身に付ける指導をしている。中学校では、自分が就きたい仕事に必要な資格や学歴といった、将来の方向を明確にするための学習や職場体験を行い、これらを踏まえた進路指導等で夢や志を身につけられるようにしていく。職場体験を新聞にまとめたり、報告会やホームルームで話し合うなどして、共有し励まし合いながら取組を進めることで効果が上がると考えている。カリキュラムはしっかりあるので、工夫し改良しながら取り組んでいきたい。

#### **市長**

自分の進む道を早期に見つける、選択するということを含めて、「志教育」があればよいと感じている。そういった機会をどう増やしていくか。子どもたちが好きなこと、目指すものを見つけ、自分自身が活かされていくか、役に立つかを考える機会を設けていければと思う。

#### **委員**

添付されている資料は大変素晴らしい。素晴らしい学びをされたことが、ひしひし

と伝わってくる。職業体験は、挨拶や感謝等も学べる機会となる。サイエンスフェスタや、亀岡商工会議所青年部のかめザニアも素晴らしいイベントなので、活用しながら進められるとよいのではないか。また、道徳を活かして社会性を身につける教育ができればいい。志教育は、6年生を送る会などで小中学校とも近い内容のものがされている。モデル校を作って実施する方法もある。個人的に志はよいものだと思うが、実際は折れたり志半ばになってしまう事もあるので、そうなった時のフォローも検討が必要。スタジアム建設が始まっているので、工事現場を見学することもキャリア教育やふるさと学習につながると思う。

### **市長**

スタジアムの話は、ふるさと学習としても有効だと考えるので、ぜひそういった機会を設けていきたい。志は大変難しい。先生方が子どもたちに説明できる体制を作らないとただの発表会になる。まずはモデル校を作って全体を高めていく。

### **委員**

早いスピードで時代が変わっている。大卒者の3年以内の離職率は30%。今の子どもたちは、予定調和ではいけない人生を歩んでいくことになる気がする。これまでのキャリア教育を反省的に捉えて見直していくことで、形にはまらないそれぞれの学校で実践したいキャリア教育ができれば能動的キャリア教育になる。市長が考えておられる志教育も各学校に問いかけてみて、議論の中で検討していけばよいものになるのではないか。

### **市長**

志があればできることもある。キャリアを決めるために大学へ進学することもある。今年3月に亀岡川東学園で実施した時に感じたが、自分がしたいことが明確になっていけば選択肢が見えてくる。学力とはまた違った面での取組である。早期の気づきが大切だと考えている。夢や希望が志に成長する。志の立て方が大切。立て方が身につけていれば挫折しても立て直せる。生き抜いていくためにそういった力を身につけてもらいたい。いろいろな経験や学びを通じて何を受け取ってもらえるかが大事。教育の中に入れていければよいと思う。亀岡川東学園で子どもたちは「人のため」の志を多く持っていた。志の立て方を教わらないといけない。志を立てられない大人も多い。

### **委員**

どうしても小学生をイメージして発言してしまうが、志教育とキャリア教育を区分することが難しい。小学1年生に人間関係を身に付けさせるために、「挨拶しましょう」という指導から始まって6年生まで様々な経験を積み重ねていく。外から見れば、職業体験だけがキャリア教育だと思われる節もある。職業体験も事前指導、事後指導をしっかり行い、自分の内面がどう変わったかを話し合い内面を高めていく必要がある。志は教師が教えるものではなく、自らが見つけ出していくもの。そのためのアプローチが必要と考える。

## 委員

小中のキャリア教育はずいぶん前から行われている。夢や希望、目標、志は持たそうと思って持てるものではない。これだけ社会の変化の力が強いと子どもも影響される。周囲に「カッコいい大人」がいないことが根本にある。キャリア教育を行うことは意義のあることだが、もっと大きな力があり中々難しいと感じている。

### (4) 不登校対策について

#### 教育長（説明要旨）

数年前から不登校が急激に増加し、小学校では全国平均を上回っている。不登校のきっかけは様々であるが、「家庭の問題」が増加している。背景として「貧困」や「虐待（ネグレクト）」が増加してきているのではと危惧している。文科省の調査には項目がないが、今年度からは、学校への調査項目に加えている。調査結果を分析していく。不登校に対しては、別室登校等で何とか学校に通えるよう御支援いただいているが、それでも登校が難しい子どもは、教育研究所の適応指導教室でお世話になっている。昨年度の通所児童で、4月からの学校復帰や高校進学した例もある。PRしながら積極的に活用いただけるようにしたい。

#### 市長

不登校が平成27年度から増加している。不登校やひきこもりには、社会の外圧や人間関係、いろいろな要因があると思うが、何が要因か感じることがあればお願いする。

#### 委員

不登校とその先のひきこもりは多様で、一括りにすることはできない。一番思うことは「不登校＝問題児」という見方が違っている。子どもという個人と学校という環境に問題が生じているのであって、環境を変えることで成功体験に変わっていく。増加した要因は構造的なもの。子どもは多様化しているが、展開される教育を含めて学校はまだまだ定型的で対応できていない。ミスコミュニケーションと考えるのが合理的だと思う。

#### 市長

多様性にどのように対応していくのかというところ。多様性を受け入れる土壌をどう広げていけるのか。その範疇はと言われるとわからない。

#### 教育長

学校は確かに画一的な部分はある。授業そのものの見直しをしていかないといけないという話は全国的にもある。子どもたちがお互い議論できるような学習や、学習スタイルを選択できるように考えていかなければまだまだ増えていく。ただ学力低下につながる場合もあるため、すぐに対応できるかと言えば難しい。研究的にどこかの学校でチャレンジしてもいい。

## 市長

平成 28 年度の中学生 84 名の在籍校の分布はわかるのか。

## 教育長

学校の規模と比例している。ただ小規模校の方が出現率は高い。

実数としては規模の大きな学校が多い。今日は細かいデータを持ち合わせていないが、月に 2～3 回休む子も不登校に入っている。整理する必要がある。ずっと休んでいる子は、やまびこ教室等のアプローチをしている。出られなくなってひきこもると長期化する。何とか外に出られる状況を作ることが大事。

また、昔は心の問題を抱えている子が多かったが、今は親が朝起きないなどの「家庭の問題」の場合も多い。いろいろなパターンで手立てを取らないと難しい。

## 委員

不登校の子はみんな厳しい状況ではある。半年～1 年のスパンでどれだけ変化・変容をしていくかが教育の核となる。一定期間での変容率を求められた時、問われるのが「教育の質」である。環境設定に頭を使うし、共同的学びも必要となる。不登校の子の教育と新たな教育観はかなり重複する。教育を構成するという点では、小中一貫教育とも近い。不登校対策について視点を切り替えていくと、教育現場にいろいろなヒントが生まれ、新しい教育を作ることには活用できると考える。

## 委員

不登校の状況は、いろいろなケースがあり、学校現場では手探りでやってきた。教職員の知識だけでは不十分と考え、関係機関や家庭と連携しながら進めてきた。学校の人数は限られている中、対応は日々で未だに何が一番良い対応方法かわからない。学校では 1 人でも多く対応できる教員が欲しい。

## 委員

学校のあり方もであるが、家庭のあり方も問題。家庭内で殺人がおこる時代。運営する児童養護施設に、虐待が原因で入所する子は約 70%あるが、府の調査では約 95%が実の親子間で起こった虐待。これまでは継父母が多かった。子どもが親を拒否するケースも増えてきている。又、入所する子の高年齢化もしており危惧している。当たり前前の家庭のあり方が厳しい。それが不登校に少しはつながっているのかもしれない。

教育委員会として対応していくには家庭教育支援が必要だが、受け皿ばかり作っても仕方ないとも思う。キャリア教育を通じて学校でも多様な対応ができないか。

## 委員

国の指針にも地域とのつながりが言われている。いろいろな人たちとつながりを持つことが大切。学校の先生だけでは限界がある。画一的な教育はローコストだが、多様な学びをマトリックスのように加えるとコストがかかる。現場だけでできることではなく、行政サイドの合意も必要。新たな教育をコストがかかっても作っていくという考えのもとに実現するのか、折り合いをつけなければならない。子どもたちが未来のビジョンを描けるような教育を展開するためには、そういった環境を作

っていく必要がある。

### **教育長**

「キャリア教育＝選択できる力」である。強い親が全て決定し、選択をしてこなかった子が選択することを求められたら固まってしまう。小中学校の間に、自分で選択する機会はあまりないが、自分が選択して自己評価させる機会を与える。部活動を選ぶのも選択の一つ。不登校になっても自分で選択をしていれば、そのうち芽がでて社会に出ていくことも可能になる。ただ、大学の入学式や入社式に親が来る時代であり、家庭と子どもの関わり方について感覚の違いはある。

### **市長**

新たな教育と言われた。いい教育とはなんだろうか。学力があがればよいのか。与えられるだけでなく、選択する力をつけるカリキュラムが必要ではないか。人生は選択の連続である。選択するためには状況を確認して判断し、結果を検証する能力が必要となる。判断のできる児童生徒をどう育成していくか。画一的でない対応を、教育現場で考えていってもらうことで不登校問題も変化してくるかもしれない。学校の選択制も一つの手段。何が子どもたちにとって「いい教育」なのか議論をすることが必要である。

### **委員**

逆説的ではあるが、ある程度の制約の中でこそ子どもの多様性や自由度が増すと考える。子どもはあらゆる場面で学ぶ。悪い事を避けて何もかも安全にするのは考えものである。先週あった小5の授業参観で、授業中に児童が参観者に物差しを向けたり、机を倒す児童がいた。私は周囲の子どもが何を学ぶかや教師の対応に興味を持った。学校に行きたくないというのも子どもの一つの判断。フリースクールに来られる子の方がある程度パターン化されているのではないか。

### **委員**

フリースクールに来る子も多様である。昔はいじめられてくる子が多かったが、今は学校の授業が退屈で受けていられない子が来たりするので、知的レベルや発達レベルもまちまち。発達的な偏りがあり、言語レベルはとても高いがそれ以外は低いという子もいる。いろいろな子が来るので、その子をどうしていくのかで変わっていく。「更新性」が大事なキーワードになると考える。新しい学校を作るにしても教師の意識をどう更新するかが大切。どういった学校を作るかも含めて議論していく。京都の東山泉小中学校も、立ち上げるまでに3年かけている。学校を作ることは、教師にとってプラスαの仕事になるためエネルギーが必要になる。エネルギーがあってはじめて良い学校ができる。覚悟が必要だが、亀岡の公教育がそういったものを目指すのであれば素晴らしいことだと思ふし、微力ながらお手伝いしたい。

### **副市長**

教育が画一的で多様性にマッチしていないという意見があり、一方で枠組みがあった方がよいとの意見もあった。私自身の経験からいうと、学校は社会にでるための基礎的知識を学ぶ場と考えていて、そこに多様性は必要ないのではと思っている。

どちらかと言えば社会の画一化が問題と感じている。他には、関委員の不登校児童の現場での指導の話が印象的であった。自分自身も、子育て中に子どもが思わぬ方向に行った時、対応した方法が本当に正しかったのかと思うことがある。先生方は教育のプロなのでわかっていると思っていたが、そうではないと実感でき、御苦労を痛感した。

### **教育長**

昭和 50 年代の終わりに初めて不登校の対応をした。何をしても登校してくれなかった。発達障害も、始めは「何だろう。」だった。社会の変化が全部学校の問題になっている。先生方には本当に頭が下がる。問題に対応していくために、学校だけでなく福祉や医療と連携していく取組を進めている。外部に助けを積極的に求めている。手をつないでくれるところが増えてきているのはありがたいと感じている。

### **委員**

子どもが自ら課題解決する取組の一例であるが、今多くの学校で修学旅行の見学先を自分たちで選択・決定・調査・活動する学習を取り入れている。昔と比較すると無事に帰ってくるか不安な面もあるが、児童・生徒の成長過程において良い経験となっている。また、小中一貫教育と学力向上の関係では、小学校と中学校がそれぞれの指導の長所を交流し合い、形でなく内容を充実させないといけない。言葉で言うのは簡単であるが難しい課題である。そのためには、小中一貫教育推進のための指導主事を置くなど、人材面でプラス  $\alpha$  があれば進みやすいと考える。

### **委員**

小中一貫教育を進めていただきたい。直近の課題である学力向上に取り組めるシステムである。継続した生徒指導と特別支援教育においても、情報の共有と継続した支援が可能になる。効果が期待できる。ただ現場の先生方がどう考えるか、議論が必要である。「良い教育」だが、我々が受けた教育は多様ではなかったと思うが、良い教育を受けたと思っている。人と人とのつながりから学ぶことが教育の基本だと思う。当たり前の教育は不動のものと感じた。

### **委員**

特別支援教育は考えていく必要がある。普通教育の領域からいうと端っこのほうに思えるが、教育の本質が見えてくる。学力についてであるが、都立高校の独自テストの話が今日の日経新聞に出ていた。大学入試共通テストへの移行によって、入試や学力テストのあり方も変わってくると京都府教委も言っていた。どうなるかはわからないが、学力とは何だろうという検討も必要ではないか。また枠組みの必要性であるが、どんなものにも必要である。フレームがないところに実践は存在しない。状況に応じたフレームの更新の頻度と度合のバランスが大切と考える。

### **委員**

私の夢であるが、社会も変わって保護者も多様化しているが、どんな背景がある子ども困ったことがあったら救いを求められる、逃げ込めるような学校になればいいと考える。子どもは生きる力を付けるための学習権が保障されなければいけない。

## (5) その他

### 市長（説明要旨）

亀岡市として、子どもたちにいろいろな体験をさせることを考える中で、今年度から開始した女性 100 人会議で、子どもを運動公園プール（以下亀プー）に連れていったことがないというお母さんの話を聞いた。これまでもふるさと納税の財源で保津川下りの体験はプレゼントしているが、今年から、小中学生を対象に亀プーの平日利用券のプレゼントを開始することとした。小学生 3 回、中学生 2 回である。夏の思い出作りや友人と交流してもらおう中で、ふるさと亀岡の施設を体験してもらおう。小学生には保護者の付添が必要だが、保護者分の無料は実施しない。みなさんに知っておいていただければと思う。

### 4 教育長あいさつ

長時間にわたり、大変貴重な御意見をいただくことができた。学校規模適正化も、反対の声にも丁寧に説明していく中で御理解を得てきた。規模適正化というよりも新しい学校を作るという思いで、しっかり準備を行い取り組んでいきたい。その中で亀岡川東学園や他市の先進事例や課題も学びながら進めていく。後半では、子どもたちにどんな教育を与えるとよいのかという議論をいただいた。積極性・豊かな人間性に加え運動能力もバランスよく子どもたちを成長させるため、思いを取り入れながら亀岡の教育を前進させていきたい。

### 5 閉会